

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

東京の暁星高校は、2011年から毎年継続して春休みや夏休みにカリタスベースでのボランティアへ参加してくださっています。今年の春休みもカリタス米川ベース（現 カリタス南三陸ベース）で活動され、参加した5名の生徒さんから体験記が届きましたので、ご紹介します。また、カリタス南三陸ベースが、2017年2月頃から始めた「草木染め」と、カリタス石巻ベースのオープンスペースのご利用が、2万人を突破した時の様子とこれまでのオープンスペースの歩みを簡単にご紹介します。

最後に、福島県では、5月11日に、東京電力福島第1原発事故に伴う帰還困難区域がある7市町村のうち、「特定復興再生拠点区域(復興拠点)」設置の予定がない南相馬市を除いた全自治体の整備計画認定がそろいました。遅い地域でも2023年春の避難指示解除を目指して、今後、復興拠点が整備されていく予定です。まだまだ復興には時間がかかります。皆さんに末永く関心を持ち続けていただければと思います。

ボランティア体験記

～カリタス米川ベース(現 カリタス南三陸ベース)にて～
暁星中学・高等学校

【「感謝」を学んだボランティア活動】

私は3月26日から3月31日までの5日間、カリタス米川ベースに行きました。1日目と5日目は移動で、実際に作業に参加することが出来たのは3日間でした。

2日目はわかめの茎と葉の部分に分ける仕事をしました。最初は1つ分けるのに時間がかかりましたが、徐々にスムーズにこなせるようになりました。その作業が終わった後、包丁の刃ではないところを使って網の掃除をしました。とても根気のいる仕事で、大変でした。でも、昼休みに手作りの料理をごちそうになり、また飼い犬のココが可愛くて癒やされたりしました。



社会福祉協議会のお引越し



役場から大型デスクなどを運び出しました

3日目は社会福祉協議会の引っ越しの手伝いをしました。とても重い物が多く大変でしたが、声を出し合いながら協力してなんとか無事に運び終えることができ、また引っ越し担当の方との仲を深めることが出来ました。

4日目は2日目とは違う場所でしたが、わかめの作業をしました。ここではわかめの変色しているところを切るという作業でしたが、この作業もとても根気のいる仕事でした。

以上、私が参加した3日間でした。ちなみに、私は今回のボランティアが2回目でしたが、以前とは違うものを得ることが出来ました。それは、感謝です。なぜ、得ることが出来たかということ、私が作業で疲れている際、ベースから作業場まで連れてきてくださったドライバーの方が私を見て、「楽な仕事はない。だから、毎日働いているお父さんやお母さんに感謝しなければいけない。その感謝を忘れてはいけない」ということを言われました。その時、私は当たり前のことを改めてこのような形で知ることが出来ました。なので、これからは今まで以上に両親に感謝していきたいなと思いました。

最後に私は米川ベースでのボランティアに参加することができ、とても良い経験を得ることが出来ました。また次の機会があれば、参加したいです。

宇田川 海渡

【初めてカリタス米川ベースのボランティアに参加してみた】

初日。東京駅から新幹線、バスを乗り継ぎ、約半日かけて米川ベースに着いた。そこには僕たちだけではなく、他の学校から来た人たちもいた。毎晩食後に、次の日自分がどこを手伝いに行きたいかを決める。僕は次の日、椎茸の工場に行くことにした。

翌朝、朝食を済ませ、昼ごはん用におにぎりを作る。椎茸工場に着くと、そこで働いている人から作業の説明を受け、手伝いを始めた。主に椎茸の菌が入った土のブロックを整理するというものだった。半日作業してみて、その土ブロックはひとつひとつ重く、力のある僕たち高校生でも腕が筋肉痛になるほどだった。それを僕たちより年上の方が毎日していると思うと、ほんとにすごいと思うし、普段食べている椎茸に対してのありがたみが深くなった。

2日目は農家でビニールハウス作り、土を耕す作業、3日目はわかめの変色部分をひたすら切り落として束ねてまとめる作業をした。

3日間手伝いをしてみて、震災から7年、僕たちが想像しているような災害の跡はなく、復興に向けて様々な重機が動いていた。作業はどれも驚くほど大変で、体に疲れが溜まった。昼食時や休憩時には震災当時の悲惨な状況、テレビや新聞では聞けないような話を聞けてとても貴重な事を聞けたと思った。ベースでは作業を共にした人たちと交流出来たのもすごくいい経験になったと思う。

まだまだ農業、漁業の人たちは人手が足りておらず大変だと思うので、また手伝いに行きたいと思う。

竹谷 蓮太郎



わかめの切り落とし作業のお手伝い



手際よく作業できたらうか...

【被災地での大きな経験】

震災から7年、これまで被災地に対し、何の役にも立てていなかった自分にとって、今回、役に立ち始める最後のチャンスだと思っての参加だった。

被災者のために、被災者に寄り添おうという思いで行ったボランティアだったが、今振り返ると自分が与えたものより与えられたものの方が大きかったと感じている。

初日は漁師であるCさんのところへ行き、わかめの芯抜き作業を行った。そこで今回の津波の被害だけでなく、1960年に起こったチリ地震による津波で家を流されてしまった話も聞くことができた。今も被害に見舞われた事が信じられないという表情で語る彼の目には涙が

見えて、テレビで情報を得るのと、被災者の目を見て話を聞くのとでは大違いだった。

別の日には、障がいをもった子どもたちの施設へ行った。最初に感じたことは勤めているスタッフさんたちの人間性の素晴らしさだ。誰に対しても腰が低く丁寧で、自分自身の未熟さを痛感した。そして最も印象的だったのは、スタッフさんが発した「遊ぶときに柵の外に出てはいけない」という言葉であった。柵が社会との隔たりだと感じられ、彼らが社会から制限を受けているという意味で違和感を覚えたのだ。しかしそれは僕の未熟さが原因だったのかもしれない。

未熟な自分自身と対比し、そこに自ら手を差し伸べる人がいること。僕はこれらのことをふまえて、自分が将来何をどれだけ自主性をもって行動できるかを考えさせられた。

たった三日間で、正直、貢献できたことは少ないと思う。しかし今も苦労して生活している人と触れ合うことは大きな経験となった。そのことをいつも心にとめ、自分がこれから「人のために」何をして過ごすのかを探っていきたいと思う。

今回この多感な時期に行くことができて本当に感謝している。

杉山 侑多朗



震災から7年が経ち、今では美しい海が広がる

【漁師さんとの再会、次回活動への意欲に】

今回は、2回目のボランティアだった。

最初に漁業支援をした。前回、ボランティアに参加した時に2回行った場所だったので、漁師さんが覚えていてくれて、とても嬉しかった。漁師さんの家の犬も相変わらず可愛くてじゃれ合うのが楽しかった。作業は、めかぶの芯と身の部分を切り分ける作業で、とてもめくるしていて難しかったが、コツを掴むとスパスパ切れて気持ちよかった。一緒に行った同級生と海で押し相撲をしたのも楽しかった。また、漁師さんの家に行って、きのこ嫌いを克服できて良かった。

2日目は、南三陸農工房の手伝いをした。午前はビニールハウスの補強のために、黒いテープをビニールハウスの上を通してフックに結ぶ作業をした。黒いテープがねじれてしまい、テープを上に通したまま直すのがとても難しく、5人で3時間もかかってしまった。農家の方は2人で1時間しかかからないらしく、すごいと思った。

午後はじょうろで肥料を田んぼにまく作業をした。じょうろはとても重くて腰が痛くなった。畑の雑草刈りは、くわが指に擦れて皮が破れ、とても痛かった。とても広いのにいつもは二人で作業をしているというのは大変で、すごいなぁと思った。

3日目は、障がい児の見守りを手伝った。いろいろな障がいを持った子どもたちがいた。しかし、皆元気いっぱい、すこし安心した。3日目が一番疲れた。

今回のボランティアは、前回と違って3日間別々の活動場所へ行った。いろいろな事を学べて良かった。

今回一番苦労したのは体調面だった。花粉症が酷く、ベースのティッシュ箱を数箱使い切ってしまい、申し訳なかった。

漁師さんに覚えていてもらって嬉しくて、また次回も行きたいと思った。

西村 譲



ベース前で千葉ベース長とモアイ像と記念撮影



朝の祈りの風景

【ボランティアを通じて得たこと】

私は今回、初めてボランティアに参加した。作業日三日間で「椎彩杜」での椎茸栽培、わかめ加工、「にじのわ」でのハンディキャップを持った子どもたちの見守りをした。その中で、とても印象に残っていることがいくつかある。

まず、「椎彩杜」で作業をしたときの常務さんの態度だ。仕事内容を一つずつ教えていただかないとどうしてよいかも分からない、ただの高校生である私たちに対して、会社の役員たる人が一人前の人として対応をしてくださった。施設がほぼすべて津波で流出してしまったという、御自身のとても大変な境遇にもかかわらず、私たちに対して細かいところまで気にかけてくださった。

次に、「にじのわ」で子どもたちと遊んだ時、障がいの重度の差こそはあれ、みんな笑顔でとても元気に遊んでいた。しかし、かつての優生保護法のもとにおける強制不妊手術のことも今ニュースに取り上げられ、誤った偏見が減っているとはいえ、とくに地方ではいまだに風当たりが強い。

そのため、この子どもたちがいつまでも笑顔で過ごすことができるのだろうかと不安になるのと同時に、そうであるような社会づくりに少しでも貢献できたらなと思った。

最後に、町としては表面的には少しずつ復興してきてはいるものの、川・海の近くには何もないということだ。そして、特に、わかめ加工をした日に漁師さんのお宅でお昼をいただいたときに、部屋の壁面に津波の痕跡が残っているのを見て、都会ではもうすべてが終わったかのように震災前と同じ日々が流れているが、実際には復興はまだまだ終わってなどなく、被災された方々が「日常」を取り戻すまでには、まだまだ人手も時間も必要であるということを強く認識させられた。

今回のボランティア活動で、はじめは何をすればよいのか右往左往してしまっていたが、少しは皆さんのお役に立てたと思う。そして、自身としても、めったにできない経験を通して様々なことを考え、学ぶことができ、これから生きていくうえで、とても大きなものを得て、少しは人として成長できたような気がする。再びボランティアに参加して、今度は様々なことを学ばせていただいた分の恩返しを少しでもしたいと思った。

山東 真樹



にじのわの皆さんと一緒におでかけ

草木染め体験

カリタス南三陸ベース 千葉 道生

1年程前、静かに雪が降る東北の田舎の片隅で、被災地のために何か面白いことは出来ないかな？と考えていました。そんな時、お手伝いに行った先で藍の種をいただき、乾燥葉を作ったのを思い出し、のれんを染めてみると、これは面白い！南三陸町の皆さんも喜んでくれるかな？と草木染めの染料を探しに山へ。お隣の米川森林組合の方のご協力のもと、キハダ、山桜、イタヤカエデ、山茶花など様々な自然の素材を集めることができました。



キハダの木



染料

樹皮を削り、煮出してから手ぬぐいを染めてみると、とてもきれいな優しい色になりました。模様づくりなどの作業も面白かったため、「これならきっと体験しに来る人が楽しんでくれるだろう」と思い、南三陸町の仮設住宅や復興住宅で「草木染め体験」を開催させていただきました。

私たちは素人で、伝統的な染物を作られている方たちの作品を見ると、安易にワークショップのような形で開催してよいのだろうか？とも迷いましたが、あるプロの方の本を読むと「草木染めは自然の染料を使うので、どのように染まるかは出来てからの楽しみ。正解も失敗もない。とにかく楽しんでください」と書かれていました。私たちはその言葉で安心し、染物を楽しんでいこうと決めました。



模様づくり用型板



布に型板を挟んだり輪ゴムで絞って模様づくり

実際に仮設住宅や復興住宅で始めてみると、布やTシャツなどを持参してくる方たちもいて、興味を持たれているようでした。好きな色を選んでから模様づくり（絞り染め、型板挟み染め）が始まるとデザインを思い描き、和気あいあいと作業をしました。染液に浸し染まっていく様子に皆さん感激していました。出来上がった作品に「自分のこと褒めるようだけど素敵だ！」「のれんにいいね」などの感想がありました。布を広げ、うれしそうに眺める皆さんにこちらまでうれしくなりました。



自然の染料を使って染色中



きれいな色に染め上がった布

中には最初、自分たちにできるか不安そうの方もいましたが、模様や色を考えていくうちに盛り上がっていききました。「またやりたい」「服を染めたい」という声もあり、皆さん童心に帰るようで夢中になって作業する様子が印象的でした。手ぬぐいが完成した時、うれしくて歌い始めた方は「これから体操の時にかぶれるね」と話され集合写真で早速かぶっていました。新しい集落は田舎の雰囲気を感じづらくなっている中、自然の染物があるとどこか懐かしく良い雰囲気になっているようにも見えました。



障がい児の見守り施設で開催してみた時は、染液は二種類、模様づくりは輪ゴムを使う絞り染め一種類にして作業をシンプルにしました。自分で考えた折り方で布を折ってから輪ゴムをかける子、作業より染色道具に関心を示す子、染液に布を入れることを面白がる子など、子どもたちの反応は様々でした。出来上がった布を両手で持ち上げ、しげしげと見入る子がいて、とても気に入った様子でした。私たちスタッフも要領を得たところと、さらに研修したいところを見いだしながらも草木染めの奥深さを楽しんでいます。

南三陸町内を一通り巡った後、石巻ベース、大船渡ベース、釜石ベースでも開催させていただき、スタッフ間の良い交流にもなりました。普段はお互いのベースで頑張っている者同士が活動を共にすると温かい雰囲気が2倍にも3倍にも感じられ、右も左も分からない他のベースで活動させていただくことで、初めてボランティアに参加した時の新鮮な緊張感も味わうことができました。

ここ数年、東北では仮設住宅から復興住宅への引越しが進み、終の棲家でのコミュニティが作られていく大切な時期が続いています。自宅や家族、職場を失い避難所から仮設住宅での長い生活を経て、何度も新しいコミュニティが作られていく日々の中、人と人が触れ合う時間をどのように作るのか？この大きな課題について地域の社会福祉協議会や自治会などと話し合ってきました。これからも東北の皆さんと、時間を忘れて楽しい時間を過ごせるような場所が、少しずつ広がっていくとよいなと思っています。



皆さん良い笑顔で、自分がデザインして染めた布を持って記念撮影

オープンスペース来場者2万人達成！

カリタス石巻ベース

2012年1月、現カリタス石巻ベースでオープンハウスを行ってから約6年4ヶ月が経ちました。この間、ベース1Fオープンスペースでのお茶っこを利用された方の人数が、2015年6月11日（約3年半）で1万人達成。その時の利用者は、米川ベースでボランティアをして来られ、石巻ベースを訪問してくださった男性でした。

そして2018年5月15日で、記念すべき2万人達成となりました。

ニュースレターのメール配信をご希望の方は、お名前などをご記入の上、sdsc.koho@gmail.comまでメールをお送りください。多くの方に活動状況や被災地の現状を広めていただきたいと思います。

当日の午前の時点で、あと4名となり、お昼休み後、午後から、いよいよ秒読み態勢。誰が2万人目かな～誰が来られてもおかしくない、そんな緊張感の中、1人、2人、3人、そして記念すべき4人目に入ってきたのは、常連の女性利用者Iさんでした。ドアを開けて入ると同時に手作りの久寿玉が割れ、2万人達成と書かれた垂れ幕が下がってきて、お祝いのクラッカーで歓迎しました。ちょっと驚いた様子のIさんでしたが、「あなたが主演」と書かれたたすきと、淡いブルーのレイを掛けられ、やっと笑顔に。その後、記念品の贈呈、惜しくも先に来られた3人の方とスタッフ、ボランティアさん揃っての記念撮影では、ちょっと照れ気味のIさんでした。

Iさんは、週に2～3日ほど利用され、手芸品を作るなどしておられます。早くに旦那さんを亡くされ、当時中学1年生のお子さんを筆頭に3人の子どもを女手一つで育て上げられた方です。また何度か大きい病気にも罹り、大変な思いもされたとのことでした。それも今は乗り越えられて、元気にカラオケや人形作りなどをしながら毎日を楽しんで過ごされています。



記念すべき2万人目の利用者となったIさん
ベーススタッフから緊張気味に記念品を受け取っていました

オープンスペースでは、2万人目を迎えた後も、にぎやかで熱気ある雰囲気の中、いつも変わらず皆さん楽しく過ごされています。あるテーブルでは、人形やブローチなどを作られている皆さん、あるテーブルでは、地元のプロ野球球団の話熱く語られている方たち、また違うテーブルでは、スタッフに抱えている心配事や身の上話をされている方たちなど。

ある利用者さんから、このようなことを言われました。「ここには、いろいろな思い、事情を抱えられている方が来られるけれど、一度来ると皆さんの顔が明るくなって帰られてるように思う」と。

紆余曲折ありながらも、オープンスペースが利用者の皆さんにとって安心して過ごせる場所となり、今日もこうして活動が続けられていることに心より感謝いたします。これからも様々な人々が出会い、交流できる場、そして谷間に置かれた人々に寄り添う場でありたいと思っています。

佐藤 光典



5月14日夕方、「明日でいよいよ2万人目の利用者さんになるかも。可能性大だね」と、喜びにあふれたスタッフの声とともに、過ぎ去った厳しい日々のが懐かしく思い出されました。

石巻ベースは、最初、カトリック石巻教会の中に立ち上げられました。2011年3月24日のことでした。まだ、震災から直後のこと、被災された人々は緊急避難所で生活なさっていました。大勢来てくださったボランティアさんは、泥出し、ガレキ撤去などの毎日でした。そのうち、教会の一番近くにある緊急避難所は、門脇中学校の体育館の避難所だということが分かりました。

この方々に何か支援をと思っても、避難所には、住民の方以外の立ち入りは許されず、はがゆい思いをしていました。その時、避難所にいた人が、「私たちは火が使えないので、カップラーメンを食べたくても、お湯がないし、寒いので、温かいお茶が飲みたい」と訴えられたことをヒントに、体育館の入り口にテントを建てる許可を得、そこで、お湯出しを始めました。この支援活動は、非常に喜ばれ、仮設住宅のお茶っこでも、あちこちで「お湯出しのカリタスさん」ということで、大変感謝されました。

2011年8月、ベースを教会から現カリタス石巻ベースの建物へ移転し、1階を癒しのスペースとして整備する等の改修工事が始まりました。工事が終了した2012年1月、オープンハウスの日を迎え、その後、本格的にオープンスペースでの活動が始まりました。

活動当初、オープンスペースでは来所の方にお名前と住所を書きいただくようお願いしたのですが、ほとんどの方が「私、書くことが出来ないんです」と、悲しい顔で申し訳なさそうに言われ、お話を聴かせていただくたびに、心の中の闇の深さを感じました。2012年1月28日に石巻ベースが開所し、3月8日No.1から利用者数の把握をスタートしました。この年は一年間で1912名の利用者さんが見えました。

私の自宅も全壊し、仮設開成11団地で2年間生活しました。毎日仮設から、市内バス、徒歩で約1時間かけてベースに通っていましたが、往復の満員バスの中、歩きの道すがら、日々変わる被災者たちの心の叫びをたくさん聴かせていただきました。その都度、ベースの利用者さんたちと重なり、寄り添いの大切さを学びました。

5月15日、2万人目を迎えた喜びとともに、あの時、お弁当のおにぎりを分け合って食べた方。涙をいっぱい流しながら辛さを話されて帰られた方。また帰られる時「おかげ様でらくになりました」と、感謝の気持ちを伝えていただいた方々。あの時、どこにも行き場がなく、山を越えてはるか遠くから歩いてベースを利用された方々などの幸せを今も祈るのみです。



オープンスペースの様子（2018年）

現在のベースは、利用者さんたちの笑顔があふれ、楽しい会話でいっぱいです。その中で、病に苦しんでいる方や大きな悩みを抱えている方などがベースに見えると、利用者さんたちがそっと傍に寄り添っている姿が見られます。何度か見せていただくたびに、寄り添いをずっと続けてきたことの大切さ、小さい小さい日々の積み重ねが利用者さんたちの心の平安につながっていることを感じました。今年もベースの行事として、満開の桜に初めて出会った4月の平筒沼（びょうどうぬま）でのお花見、6月中旬にはやくらいガーデンでバラの花を楽しむバス旅を企画しています。利用者さんたちの素敵な笑顔が見られることを願って。

佐藤 さだ子